

令和2年度 横山利弘先生を囲む道德教育東京勉強会（5月報告）

令和2年5月25日

新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う緊急事態宣言のため、本勉強会は3月、5月の開催を中止としました。その間に、ウェブ会議システムを活用し、情報交換と今、私たちが学校再開に向けて考えるべきことは何かを話し合いました。横山利弘先生から、話し合いの方向性についてのご助言、今後に向けてのご示唆も頂きました。以下に報告としてまとめました。

< 5月16日（土）14:00～15:50 ZOOM会議参加者9名 >

1 近況報告

- (1) 最大の感染者を抱える東京都内でも現状は休業継続だが対応は地域で大きく異なる。
- (2) 東京以外の他県の動きは登校再開に向けて準備の段階を迎えている。

2 「この2カ月で子供たちを取り巻く状況が大きく変わった。それはどんな状況か？」

(1) 家庭生活の状況

- 親の自宅勤務、収入減少、失業や倒産、家庭生活の困窮。
- 親や家族の自宅勤務によるストレス、不満、家庭内暴力や虐待等の家族関係の変化。
- 医療の最前線や飲食業を続ける親や家族を心配し続ける子供の気持ち、そのつらさ。
- 生活習慣の崩れ、乱れと食生活の乱れ。それからくる気力、体力の減退。
- 家から出られない不安、出たくない引きこもりが孤立や人間不信から不登校へ。
- ゲームやスマホへの依存が強まり不登校へ。

(2) 友人関係の状況

- 誰とも繋がりをもてない転校生の孤立感、孤独感はあまりに大きい
- 新学期初日で止まった新しい学級の人間関係への不安や心配
- スマホやSNSが使える子と使えない子、グループの輪の内と外の関係の広がり

(3) 学習環境と取組状況

- 学校からの課題の取組状況の差が広がる。
- 3年生の進路への不安や焦りが大きくなっている。
- スマホやパソコンの環境が整っている家庭ではウェブ上で様々な学習コンテンツを活用。

(4) その他の状況

- 親が医療従事者なので、そのことによる差別を受けないかという不安
- 親が保育士で、コロナがうつっているかもしれないから近づくと排除される不安
- 運動部だけでなく、文化部も目標としてきた大会、コンクールの中止による喪失感。
- 運動会、修学旅行他学校行事の中止による喪失感。
- もともと不登校であった生徒への関わり

どんな状況に子供たちがあるか話し合った。結果として、今は全ての生徒が不登校となった状況と言える。本当は登校したいのにそれができない。その登校できない状況が長引くことで、子供たちの心やからだに何が起きるのか、この視線からのアプローチこそ、寄り添うために最も必要なことだろう。現に不登校である子供たちに私たちはそんな視線を向けてきたらどうか…。子供たちの現状への理解なき教育「再開」は、子供たちに決して「再会」できない。

3 今できることは何か、どんなことに取り組んでいるか。

- 心のケアで「生活アンケート」を実施した。
- 新入生には、初日に、学年担当教員の顔写真入りのメッセージ文を配布した。
- 週1回、電話をかけている。どう、子供たちとつながることができるか苦心している。
- 5月末に、2時間、担任の生徒の個人面談を入れた。
- 子供同士のライングループでつながっている子はいいが、それに 入っていない子は孤独感を感じているのではないか。
- 登校してきた生徒に、担任がホワイトボードに質問事項を書き、生徒は首振り(縦…はい、横…いいえ)で回答。子どもの状態を把握して、あとで連絡を取るという方法をしている。
(例)「勉強、だいじょうぶ。」「友人関係、だいじょうぶ」「家族の関わり、だいじょうぶ」を提示して、首振り回答させる。分散登校時、前後の生徒に気遣いなくアイコンタクトでつなぐ。
- 登校が再開した。面談からやろうという意見はあるが学校全体の足並みはこれから。
- 登校再開。図書室で、本を貸すようにした。
- 登校再開前の生活アンケートでは、親のいるところなので、聞きにくいこともある。(親子関係や、とくに、「親による虐待」に関わることなど)
- その場の空気感を共有することの大切さ。
- ZOOM 朝会をやってみた。
- ソーシャルスキルトレーニングで、人間関係づくりも考えたい。(これは学活として)
- 教師が登校再開した時、はじめての学活、教科また道徳の授業で、何を語るかが大切。みんなで考えている。(課題作文「今を生きる大切さ」。担任のメッセージ付け、返却)
- 6月1日から分散登校?健康診断もやる。すぐに6時間授業となって始める体制でいる。
- 授業における対話、話し合い、討論については「3密」「対面」ということは避けなくてはならない。
その指導方法を検討している。道徳科のスタートをいつにするかの議論が出てこない。
- はじめの道徳科の時間で、教師が何を語るかは大事だ。読み物教材でなく、「教師の説話」で、教師が語りかけるのもいいのではないか。
- 「道はいつも開かれている」を使って、生きる希望について考えさせたい。
- 「生命の尊重」を取り上げ話をしたい。命のいろいろな側面(「有限性」「偶然性」「連続性」等)と「感謝」「生きる喜び」など、みんなで語り合いたい。
- 部活動で大会やコンクールの中止により、大きな喪失感を抱えた生徒がいる。夢や希望をどう語ったらよいか悩んでいる。
- 家族や友だちにコロナの犠牲者が出れば、「生命の尊重」も「希望や勇気」も、どんな教材でふさわしいのか大いに悩む。
- 道徳科はたとえ少人数でも授業は展開できる。取り組むべきである。島しょ部など小規模校での実践に学ぶべき。
- 少人数の道徳の授業は教師の腕の見せ所。じっくり語り合える時間がある。考えたくない教材と発問の準備が何より必要。また子供の発言で教師も大いに考えさせられる。

会議を通して「生徒の現状に寄り添う大切さ」「教員個人の思いで動けず、学校としての判断を待つもどかしさ」「各教科の授業も必要、道徳は今こそ必要」という思いを共有しました。そして、「ズーム会議は、どれだけズームしても、決してアイコンタクトできない。」ことを認識しました。

<横山 利弘先生より>

- ・有意義な会であったことがよくわかります。会員の心を解きほぐすことができたのではないのでしょうか。子供たちの今を見つめることに意義があります。話し合いの方向性を大切に。
- ・登校再開に向けて「3密」（密閉・密集・密接）を避けるための物理的な条件を整える必要がありますが、心理的な「密接」をどうしますか…。
- ・道徳科は少人数でも分散でも行うものです。ただし、今、最初の授業で扱う内容項目は何にすべきか慎重に考えなければなりません。安易に「生命の尊重」や「家族愛」を取り上げるより、子供たちの状態をよく見て指導計画を見直すことが必要です。
- ・では、教材をどうするか…。残念ながら、今の状況に打ち克つ力をもった読み物教材はそうそうありません。教科書だけでなく、また読み物教材以外でも何が活用できるか考えてみるとよいでしょう。
- ・ICT環境の整備、通信ネットワークを活用した新しい教育（GIGAスクール構想）の実現が加速化されています。「いくらズームしてもアイコンタクトはできない」という気付きから、そもそも学校とは何だろうか、学校の本質とは何かを考えてみてください。
- ・子どもが登校するようになると先生方は救われますね。でも、子どもたちの心が解きほぐされるには、まだまだ細心の慈が必要なのでしょうかね。
大道無門、いろいろと道を探しましょう。

<5月23日（土）14:00～15:50 ZOOM会議参加者13名>

1 近況報告

- (1) 東京都内では対応の違いはあるが分散登校に向けての準備が始まる。
- (2) 東京以外の他県では登校再開の段階を迎えている。
- (3) 大学ではズーム会議の授業、課題提出、個別指導、評価。学生も教員も当面自宅。

2 「3密」を避けて行う授業をどうする？

(1) 授業環境について

- 教員からの飛沫防止のため、ビニールシートを教卓の前につるす。
- 教卓の上に三面鏡のようなシートの作成を依頼した。
- 生徒一人一人の机上に同様の透明な三面鏡のようなシートを置く。
- 小学校低学年では、自然に子供が寄ってくる。その時、どうするか、距離を保つべきか迷う。
- マスクをしてフェイスシールドをするという取り組みを考えている。
- フェイスシールドを教員が活用することは、飛沫防止のためだと思うが、感染防止を子供に向けて行うことでもあり、抵抗感をもつ。
 - 段ボール会社から生徒一人一人に段ボールシールドが配布される。
 - 教員の授業を他の教室でも見ることができる校内オンラインを計画中。
(生徒は分散、先生は分離ということ?)
- タブレット端末が全ての生徒に用意される予定。
- 学校は集団生活をする場。どう考えても蜜になる。矛盾を抱える。

(2) 授業内容について

- 分散登校では、まず教科の授業が中心。学級全体に関わることは全員がそろってから。
- 保健・衛生指導、生活・交通安全指導、体操やストレッチ、ICT活用方法から始めた。
- 分散登校初日は1時間目に学活で、残り3時間は授業。学活では今の過ごし方、今の考えなど作文を書かせた。また生徒それぞれの今の思いを詩として書かせた先生もいる。
- 子供たちも分散で緊張感が高く、特に一年生では友人関係や教室の雰囲気への不安も大きく、一人一人とのコンタクトや観察を大切にする。

3 最初の道徳科の授業について

- 「新しい生活」について考える。今、どんな生活や行動を大切にすべきか。その行動面についてなぜそのようなことが大切なのか、考えさせた。
- まだ授業の中身まで子供が集中できない。今の状況で道徳をやってどこまで深められるか？
- 全校生徒にアンケートを実施（友達、部活、勉強等で心配なこと）した。この集計結果を元にして道徳の授業をしていこうと思う。
- 生命尊重、愛校心を取り上げる。教材なら「ある日のバッテリーボックス」「旗」など考えている。
- 道徳を通して子供たちの様子を見る事が大切。子供たちの表情が暗い。部活の大会やコンクールが中止になり、あまりダイレクトな話はどうかと思う。取り上げるとしても例えば甲子園を目指していた高校の監督から生徒への話等を取り上げるのはどうか。
- 生徒の状況や抱えている思いは多様。一つの価値に絞らず、詩の活用などを考える。詩の中には生き方について、生徒たちを励ます言葉がある。（あいだみつおなど）
- 「道は開かれている」も多様な価値を取り扱える。
- 星野富弘さんの「鈴の鳴る道」を使って授業をするのはどうか。
- 今、教科書を使うようになっている。どのように捉えたらいいか。
- 教科書は主たる教材ではあるが、補助教材の活用を含め、学校としての判断で著作権とその許諾に配慮して他の教材を使うことはできる。
- この状況で少人数のトークは難しい。板書も大切になるだろう。
- 目的が達成できなかった事例などを取り上げた教材化もいいのではないか。
- 今の状況で道徳の時間に子供たちが楽しかったと思うことは何か。詩を読んで、その言葉に癒やされる子供もいると思うが、お互いの声が聞きたいのではないか。お互いにどんなことを考えているか知りたいのではないか。
- 一年生は互いをほとんど知らない。いきなり自分自身のことを話すより、ここはやはり読み物教材で主人公の着ぐるみを付けて考えを出し合うほうがいい。
- こういう状況だから、その状況に特化したものを使うことにやや抵抗を感じる。いじめとSNSについては予定通り早めに取り上げたい。人権の絵本「私のせいじゃない」の活用を検討。
- 今までの手法、話し合いなども気を付けながら授業を行っていくことを考えたい。

「40人の授業でなく、20人以下の授業となることは、一人一人の空間を広くするが、一人一人にかかわる時間もできる。」「板書など指導の工夫もあるが20人で互いの考えを出し合い、聞き合い、関わり合う時間をどうするかが大切。」「どんな教材の活用がよいか判断に難しさがあるが、何をを使うか、必要な教材を教員みんなで考え、取り組むことには今、とても大きな意義がある。」ということを共有しました。

4 そもそも学校とは…

- コロナの経験が社会を変えた。学校も、私たちの生活も変化した。コロナの前と後、この経験が自分たちにとってどんな助言を与えたのか。道徳的には何を見出したのか、よりよく生きるために大切にすべきことは何か。学校の在り方を見つめ直すこととはそういうことか…、答えがみつからない。
- 授業の仕方はこれから変わっていくだろう。大学のメディア授業はオンデマンド型やZOOMによる双方向型などがある。パワポでの資料提示による講義、質疑応答、掲示板での共有、レポートの作成提出、その評価を個別に返却等やりとりを繰り返して深めていく方法が出てきている
- 道徳の時間について楽しみにしていることを書かせた。楽しみにしている生徒が多かった。人との交流ができるのが学校だから。
- 生きる喜び、生きるすばらしさを伝えるのが学校だと思う。ズームはアイコンタクトもできないし、子供にとって逃げ場もないツールともなる。その中で私達が教師として伝えられることは何か。この休業期間、課題を受け渡しするだけの僅かな登校時のアイコンタクトで、中1の子供たちへの配慮が職場の話題となった。小学校卒業の別れの大切な時を奪われた深い悲しみを抱えている生徒がいる。子供たちの心の中にある思いを大切にしている教員がいて、学校は成り立つ。学校の良さをみんなで見つけていきたい。

<会議に参加しての感想>

- みんなで前を向いていくために何が必要か考えたい。
- 生きるということについて考えさせられた。
- 大変貴重な機会でも参考になりました。
- 登校してきた子供たちに寄り添っていきたい。
- このシステムを守りながら、もっと発言したいと思うが加減は難しい気もする。しかし、この機会があって救われる思いである。
- 我々は教育のプロ。何をしていくか考える機会が大切である。
- 生きるということを考えさせられた時間。生徒と共に生きる喜びを考える時間を創りたい。
- 子供の本音をどうつかむか。心配なこともあるがプラス面もある。「家族と共有する時間が多くなり、辛くなった子、よかったという子」そういう両面がある。実態を知ることが大切。
- 教材をどうしようという悩みがある。今の状況に近い方がいいのか、遠い方がいいのか。生きることをどう捉えるか。
- 中一の担任として、小6のことを再認識していきたいと思った。
- 皆さんと顔を合わせるこのシステムに興味をもった。子供たちとの対面も楽しみである。
- 時間の制約、参加者の人数、話の内容、それをどうすることが有効な機会となるか今後

に向けて考えていきたい。

★試験的な試みとしてズーム会議を開催した。空間を越えて時間を共有し、今抱える悩みや思いを共有できた。また問題点や課題を見出すことや、対応策を交換することもできた。

しかし、踏み込んで深く話すことは当然ながら参加者が増えるに応じて難しくなる。肌に合う人もいれば、そうでない人もいる。そういうものだとして認識して今後の活用と勉強会の本質を考えていきたい。ソーシャルディスタンスは確保しても、心の距離は近づけながら、皆さんで語り合う機会をつなげていきましょう。

<横山 利弘先生より>

「今できることを捉え、限られた時間の中で、システムの制約を感じながらも、とても真面目に取り組んでくれました。生命があること、そして仕事があること、学校が始まり生徒と向き合えれば、先生方はこの2つを大切に今後の取組を進めて行かれることと思います。

しかし、もう一つ大切なことがあります。それは子供たちにとっては尚更、大切なことだと思うことです。

それは、『気晴らし』です。

子供たちは、大人たち、先生たち以上に深く傷ついています。そして不安や怖さを抱えています。この不安や怖いという感情は、大脳の中にある危険の察知や防御機能をもつ扁桃体の活動によるものだとわかってきています。少し難しい話だけれど、そう簡単に不安とか怖さという感情は消えないものだという事です。

「だいじょうぶ？」と言う言葉がけは大切だけど、そう言われて「はい、大丈夫です。」と子供が答えたとしても、そんなふりや表情をしているだけで、本当はその感情は消えていないということです。

このような内にある不安や怖さを和らげるために『気晴らし』が必要です。体を動かしたり、散歩したり、気分転換ということもありますが、『気晴らし』とは、思考停止することや欲望の赴くままにやりたいことをやるということではないのです。

今、目の前に課題を積み上げ、一つ一つ一生懸命取り組んでいます。子供たちも先生たちもそうですね。そこに、「あ～おもしろかった！」という感情が生まれることが不安や怖さを忘れさせる『気晴らし』です。

この経験を子供の中に増やしてあげることが大切なんです。プロの教師としてすべきことは、これから再開される授業の中で「あ～おもしろかった！」と、子供たちに実感できる授業を創るということです。何枚もプリントを作れば良いということではありません。おちゃらけたお話をすることでもありません。その教科のもつ醍醐味、面白さに子供たちが気付く授業を創るということです。

行事の中止や延期、土曜日授業の実施等、時数確保の方策に頭を悩ませておられるでしょう。しかし、先生たちにとっても、子供たちにとっても『健康であること、仕事（勉強）があること、そして気晴らしがあること』を大切にしたいものです。

この間のズーム会議が「あ～おもしろかった！」と先生方の中で感じられていれば、それだけで大成功です。」また皆さんで勉強会を開催できる日まで元気でいてください。」

(文責 代表 森岡 耕平)